



早稲田文学編 5

玉川重機

初めて和歌を詠んだのは須佐之男命だそうです
八俣の大蛇を倒して櫛名田姫を助けた後に

八雲立つ出雲八重垣妻ごみに
八重垣つくるその八重垣を

君を住まわせる
家を建てるよ

と詠いました
和歌は私は授業でしか知る機会がなく
それこそ神代に想いを馳せるような
遠い存在でしたが



白洲正子さんの
「花にももの思ふ春」
を読んで
とても身近に
感じられました

白洲さんは美を通して
日本の心を探し続け
追い求めた人でした



白洲正子
<1910 ~ 1998>

「花にももの思ふ春」は
白洲さんによる
三大和歌集(万葉集、
古今集、新古今集)の中の
新古今集を解説した本です



「草子ブックガイド」本編の4冊目前後編が、「モーニング」6月2日発売の27号、6月9日発売の28号に掲載！西行をテーマに、草子と青永遠屋の岬くんが旅へ。これまでと違った一面が見られます。お見逃しなく！



白洲さんの手にかかる
新古今の歌人達の喜怒哀楽が
生々しく伝わってきます

その描き方で、歌人達が
歴史の点としてでなく
自分と同じ血の通った人間だったのだと
気がかされたのでした

<後鳥羽院>
わがまだたが
人間的で正直で
愛すべき天皇だ。

<俊成>
いつも自分の不遇を
嘆いていたが晩年
後鳥羽院から銀の
鳩の杖をもらい
大喜びする。

<家隆>
一生のうちに六万首も
詠んだ多作な
歌人。おおらかで
温雅な人。

<定家>
歌は優しく、こまかで
美しかったが傍若無人、
他人の言葉に耳を
貸さなかった。

<良経>
思いかりの深い。
後鳥羽院とは
友情だ。

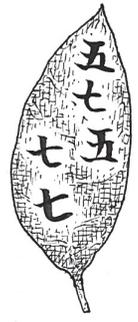
<式子内親王>
全ては夢まぼろしで
自分の悲しみだけが
リアルと思えた病弱な
女性。

<頼政>
鶴を退治した
武勇伝を持つ。
「いみじき歌仙」。

<西行>
元「北面の武士」。
漂泊の詩人。

新古今の歌人達!

五七五七七のリズムの中に
詰め込まれた
昔の人達の二言の乗達



その古くからの歌を何度も
声に出して詠んでると

その芳香は今も新鮮さを持って



私の心に強く届きました

新古今集が元久二(二〇一五年)に完成した時
良経は喜び、こんな歌を詠いました

敷島や大和とよの海にして
拾ひし玉はみがかれにけり

これからの大和言葉
日本の言葉は
どんな言葉になって
いくでしょうか



命にみちた芳香をはなつ

言葉でもってほして

「言の葉は声にほだされ
ひらかれ」想ひの香りを
はなつ気がしました



まるで茶葉が湯たぎりで
ひらひらとくまらるる